

ミャンマーの日本語学習者の作文におけるコロケーション誤用分析

Nan Myat Saw¹

Error analysis on collocation in composition of Japanese Learners of Yangon University of Foreign Languages

Abstract: The purpose of this study is ongoing research in YUFL Japanese learners' misuse in collocations. Even if student become an advanced level seem to be confused to choose the right collocation. In this study, 3 fourth year Japanese students' compositions were analyzed. And investigated the cause of errors relying on concept of their mother language (Myanmar language). As a result, students produced inter-lingual errors and some errors were caused by the lack of collocational knowledge. This paper showed that it is difficult to produce appropriate collocation for YUFL Japanese learners. And then, students used NLT web corpus search engine, how they improved their usage of collocation. This study confirmed that the use of NLT web corpus was revealed to be effective.

Key words: collocation, NLT web corpus, compositions writing, error analysis

キーワード：コロケーション、NLT ウェブコーパス、作文、誤用分析

1. はじめに

日本語学習者は文章を書く際、意味不明な文章、不自然な文章の誤用がしばしばみられる。特に、限られた時間に自由作文を書くときにはほぼみられる。その原因は母語で考えた文を日本語に訳して書くことであると考えられる。その上、語彙の選択が原因で意味がずれて通じにくくなることも考える。たとえば、日本語学習者が文章を書くときに「病気が消える」「慌ただしく走る」などの不自然さがみられる。ミャンマーの日本語学習者にみられる誤用は母語の影響も干渉に関わっているが、語と語の結びつきにも誤りがあると考えられる。田能村（2010）は語の結びつきはコロケーションの概念であると表し、コロケーションはしばしば言語表現の自然さに関与しコロケーションの慣用に従うことで表現が自然なものになり、慣用に従わなければ文法的ではあるにせよ不自然な表現になりえると指摘している。

そこから、ミャンマーの日本語学習者が日本語文章を書くとき、文章の不自然さがみられるのはたくさんの語彙の知識から適切な言葉を選べるのが困難であるだろう。その上、

¹ Lecturer, Japanese Department, Yangon University of Foreign Languages

日本語では意味が類似したことばがたくさんあり、そのことばを的確に使えるのにも混乱が生じるのであろう。そこで、学習者が適切なことばを選択することができず、不自然な表現が生じるのである。田能村（2010）指摘によると、「慌ただしく走る」の場合、文法的には正しいが、コロケーションの慣用に従わないため、不自然な表現であると判断できる。日本語学習者が日本語文章を自然で流暢で構成できるためにはコロケーションが重要な役割を果たしている。コロケーションは母語話者の立場からみると当然で自然な結合であっても日本語学習者の立場からみると簡単に学習することができない。従って、中級・上級になってもコロケーション誤用は減らない傾向だ。そこで、本研究ではミャンマーの日本語学習者の作文にみられる誤用の中にコロケーションに焦点を当て分析する。

一方、近年日本語学・日本語研究においても、情報技術発展とコーパスの大規模化に伴い、コーパスから得られる言語データを学習者の学習に応用しようという動きが日本語教育に生まれている。日本語コロケーションに関してもこうしたコーパスを活用した検索システム「NINJAL-LWP for TWC」²（以下：NLT）が登場している。このツールは検索した言葉の共起語を助詞ごとに整理した形で表示し、言葉の共起関係を統計的かつ網羅的に把握することができる。たとえば、NLTで「目標」という名詞を検索すると、「目標」を含む表現が検索され、「目標が」「目標を」といったように助詞ごとでの共起語が統計的な数値とともに表示される。このツールは辞書を補う新たなツールとして期待されているものの、日本語教育におけるアプローチや学習者の使用ツールとして十分に浸透しているとはまだ言えない状況である（寺島 2016）。このツールは日本語学習の参考になるようなコロケーションを構成する名詞、動詞、連体詞、副詞や文法的振る舞いを調べ、比較できる。初心者でも簡単に使える手軽なツールである。そのため、日本語学習者にとって流暢で自然な語の組み合わせを表現するために役立つツールである。

2. 目的

ミャンマーの日本語学習者が文章を書く際、似たような意味を表現する言葉を的確に選ぶのは困難である。その似たような語が他のどのような語とともに用いられるか、それによってどのような意味を表すかを正確に記述できない。そのため、本研究では語と語の共起関係をあらわすコロケーションの問題に焦点を当てて検証することを目的にしたい。

3. 研究課題

ミャンマーの日本語学習者が作文を書く際、不自然な表現が見られるのはコロケーションを的確に選択できず、母語を参考にし、そこから直接に訳することによって奇妙な表現

²「NINJAL-LWP for TWC」筑波大学により開発されたもので、筑波大学が構築した11億語からなる「筑波ウェブコーパス」が搭載されている。

になる可能性が高い。しかも、ミャンマーの日本語学習者が文章を書く際、NLT 使用は効果的で有意差がみられるという仮説を検証する。

4. 先行研究

日本語教育分野では日本語学習者における作文誤用分析の研究は数多くある。佐藤(1993)は日本語作文を書くときにみられる誤用の種類を①発音の誤り②表記の誤り③文法の誤り④語彙の誤り⑤表現の誤りの5種類に分類し、この分類に従って作文の誤用を扱っている。が、母語の影響の誤りは言及されていない。田北(1995)は初級後期の作文クラスにみられる言葉・語彙誤用を分析した結果、学習者の母語との意味違いが誤用の原因の一つであると示唆している。しかし、語の結びつきの視点からは分析されていない。従って、本稿では、語と語結びつきにも母語の影響が及んでいることを考察する。

語の結びつきについて国広(1985、1997)は言葉の結びつきを次のように分類している。

- ①「冷たい水」結合が自由で個々の語から意味が引き出せるもの
- ②「傘をさす」結合がかなり固定され、ここの語から意味が引き出せるもの
- ③「手を染める」語の結びつきが固定され、全体の意味が個々の語の意味の総和とは異なるものなどである。国広(1985、1997)は語の結びつきをコロケーションということばを用いていないが、こうしたものをコロケーションの種類と捉えた立場もある(山田 2007、寺島 2016)。つまり、ある単語と単語のよく使われる組み合わせのことがコロケーションといえる。

本稿ではミャンマーの日本語学習者によく見られるコロケーション誤用は国広(1985、1997)が分類している「傘をさす」のような結合が固定されているもの、「手を染める」のような語の結びつきが固定されているものではなく、結合が自由で個々の語から意味が引き出せるものの視点からコロケーションの誤用分析を試みる。つまり、「帽子をかぶる」「料理を作る」などのようなコロケーションが固定されているため間違いあまり見られないと考える。「冷たい水」のように「強い雨」「ほどよい味」などの語同士の意味的なコロケーションに着目し、考察する。そのため、本稿では、まずコロケーションとは何か、どんなものをコロケーションと考え、どこまでをコロケーションだと認めるかを考える。コロケーションの定義は多様で(金 2015)は広い意味では文法的、意味的に関連した2つ以上の語彙が結合して形成する語彙群を表し、狭義意味では慣用的にその結合がある程度固定化した語彙群、あるいは結合全体が特定の意味を表す語彙群をコロケーションと呼んでいる。

野田(2007)はコロケーションとは語(または成分)と語(または成分)のつながりの

ことであるが、語（または成分）どうしが構造的に直接関係していて、一方の語（または成分）が他方の語（または成分）の選択に影響を与える場合だけを指すと定義している。これをさらに文法的コロケーションと意味的コロケーションと 2 つに分けて考えている。文法的コロケーションというのは、ある語（または成分）が他の語（または成分）の文法的なカテゴリーを選択し、限定するものである。意味的なコロケーションというのは、ある語（または成分）が他の語（または成分）の意味的なカテゴリーを選択し、限定するものであると考えている。そして、両者の違いを文法的なコロケーションは「このようにしなければならない」という強いものが多い、意味的なコロケーションは「このようにする傾向がある」という弱いものが多いと分析している。その上、文の構造からコロケーションを次のように分類している。

1. 単文の場合（「田中が急に高橋の腕をつかんだ。」を例として）

- i. 格成分と述語成分のコロケーション（「高橋の腕を」と「つかんだ」のようなつながり）
- ii. 格成分の内部のコロケーション（「高橋の」と「腕」のようなつながり）
- iii. 述語成分の内部のコロケーション（「つかむ」と「た」のようなつながり）
- iv. 副詞的成分と述語成分のコロケーション（「急に」と「つかんだ」のようなつながり）
- v. 副詞的成分の内部のコロケーション（「急」と「に」のようなつながり）

2. 複文の場合（「駅についたとたん、雨がやんだ。」を例として）

- i. 従属節と主文のコロケーション（「～とたん」と「やんだ」のようなつながり）
- ii. 従属節の内部のコロケーション（「着いた」と「とたん」のようなつながり）

語と語のつながりであるコロケーションを「意味的」だけでなく、「文法的」まで考察している。本稿では野田（2007）の文法的コロケーションの分類を基にしてコロケーション誤用分析を行う。その上、国広（1985、1997）が分類している「冷たい水」のように「強い雨」「ほどよい味」などの語同士の意味的なコロケーションに基づいて考察する。

本研究ではコロケーション分析を行う際、大規模なコーパスが必要となる。大規模なコーパスを使ってコロケーション分析することは信頼性が高いと考える。そのため、日本語のコロケーションに関してコーパスを活用した検索システム NLT を使用する。

寺島（2016）は日本語学習者のコロケーション誤用は辞書の用例不足が原因だと考えている。そのため、コロケーションテストにおいて日英バイリンガル辞書のみを用いる方法と日英のバイリンガル辞書とレキシカルプロファイリングツールを併用する方法の比較を行った。日英辞書のみ法において適切な訳語の表示不足、解答となる表現や解答につながる表現の表示不足、複数の訳語表示のその違いを理解するための情報不足、過剰な訳語表

示学習者の類推の誤り、複数の辞書による不確認が誤用に影響を与えた。一方、日英のバイリンガル辞書と「NINJAL-LWP for BCCWJ」法と「NINJAL-LWP for NLT」法使用においては、NLT を用いて共起表現リストからの意味の検討、共起表現の有無やその数の確認ができたことが誤用を避けるには効果的であると考察している。つまり、NLT 法使用において適切なコロケーションを有意に選択できることが明らかになった。しかし、学習者の作文においてコロケーション誤用分析の研究は管見による限り、まだなされていない。特にミャンマーの日本語が学習者を対象にしたコロケーション誤用分析研究は全くない。

金（2015）は日本語を母語とする韓国語学習者における韓国語のコロケーション指導方法を文脈指導と非文脈指導の比較の視点から学習効果を検証している。その結果、非文脈指導を受けたグループは学習校が有意に高く、コロケーションの学習においては明示的に意味を提示する指導法がより効果的であるとしている。これまでの先行研究では学習ツールを用いて学習者の作文誤用分析を行った研究は見当たらない。

5. 研究方法

本研究の対象となるものはヤンゴン外国語大学日本語専攻学習者 4 年生 3 名で、日本語能力は N2 資格をもっている中級レベルである。作文課題は「ゴミ問題対策」で、800 字程度の作文を時間制限なし、辞書使用可の条件でワードを使って書かせ、電子メールで提出させる。これら計 3 の作文の中で、語彙使用に関して不自然であると感じた用例を抽出し、誤用の要因を分類する。次に、学習者に自分が書いた作文を NLT ツール使用で修正させ、NLT ツール使用の感想を書かせる。

6. 分析と考察

学習者の作文における主な誤用例は以下の通りである。これらのコロケーション強さを NLT で検索し、自然な使い分けを比較した。NLT 使用で検索した際、コロケーション使用頻度の高いものと比較した。

i. 名詞的成分と述語成分のコロケーション

1. 問題が出る

作文に見られる誤用	NLT 使用頻度	NLT 使用例	NLT 使用頻度
問題が出る	4,383	問題が生じる	4,949

NLT 検索において「問題が出る」場合、「ゲスト回答者が順調に正解して、いよいよ 750 万円に挑戦します。応接席には両親が座っています。問題がでました。ゲストは「ああ…」と小さな声をあげたり、考え込んでしまいました。」という用例が表示されている。学習者

が表現したいのはゴミ問題を解決しないと展開がきたいできない状況になり、問題が発生

作文に見られる誤用	NLT 使用頻度	NLT 使用例	NLT 使用頻度
「一流れを害する」	0	「一流れを止める」	352

するということだ。この場合、「問題が生じる」のほうが自然である。

2. ゴミの量をなくす

「量」の場合は「減らす」の方が NLT 使用頻度も高く、自然で適切な表現である。

「量をなくす」は不適切な表現である。「ーをなくす」の場合は「自分の考えに確信がな

作文に見られる誤用	NLT 使用頻度	NLT 使用例	NLT 使用頻度
量をなくす	0	量を減らす	1,902

く、自信をなくしています。」の方が自然な表現である。従って、「量」の場合は「ーを減らす」の方が自然で適切な表現で、「ゴミの量を減らす」の使い方は適切である。

3. ゴミを落とす

「ーを落とす」の場合、「世界では、1 年間に 810 万人の子どもたちが、貧困によって医師の診断等が受けられず病気で、命を落としています。」この用例の意味は、ある範囲から除く。意図的である場合にもそうでない場合にもいう。(日本語表現辞典 Weblio 辞書) 学習者が意図している「落とす」の意味は「ある対象から、付いている物を取り外す」(日本

作文に見られる誤用	NLT 使用頻度	NLT 使用例	NLT 使用頻度
ゴミを落とす	44	ゴミを捨てる	950

語表現辞典 Weblio 辞書) である。辞書の表示不足のため、意味違いを理解するのは難しく、誤用が出てくると考える。「ゴミ」の場合は、「ーを捨てる」適切な表現である。その上、上記の表により、NLT 使用頻度も「ゴミを捨てる」の方が高い。

4. ゴミは川の流れを害する、

「ーを害する」の場合、何かを悪くする。そこなう。などの意味。ゴミが川の流れをじゃまするという意味で表現する場合は「一流れを止める」の方が自然な表現である。NLT 使用頻度も「一流れを止める」の方が高く、「一流れを害する」の方が誤用である。「ーを害する」の表現は「健康を害する」の方が適切な表現であり、NLT 使用頻度も一番高い(1,229) 表現である。学習者にとっては適切に表現することは難しい。

5. ゴミを混ぜる

「ーを混ぜる」の意味は「あるものに他のものを加える。また、別々のものを加えて一つにする」と表示する。そこで、学習者が表現したいのは燃えるゴミと燃えないゴミを分別せずに捨てるという意図的な表現である。NLT 使用頻度低い表現は日常生活に使いにくい表現であり、不自然な表現になる可能性が高い。

ii. 副詞的成分と述語成分のコロケーション

1. ゴミは道や道路にばらばらになる。

学習者が通路にゴミが散乱しているということ表現したいのだ。NLT 検索によると、「家族がばらばらになる」「ばらばらになった3人」「ばらばらになると戻すのも難しい」

作文に見られる誤用	NLT 使用頻度	NLT 使用例	NLT 使用頻度
「ゴミを混ぜる」	24	ゴミを分別する	145

などが自然で頻度が高い使い方である。学習者が「ばらばら」の使い分けがよく理解していないため誤用が出てくるのだと考える。「散乱している」の方が自然であり、NLT 使用頻度も(123)高い方である。

iii. 語彙の誤り

1. 道路のそばに、

学習者が道端のことを表現したいですが、母語のことば「(ラーン=道路)(ペイー=そば)」を直訳する可能性があると考え。語彙の誤りは母語から直訳の可能性があると考え。NLT 検索結果、「財布が道端に落ちている」「道端にフウロが咲いている」などの用例が出ている。この場合ミャンマー語に考え、ミャンマー語で直訳して書いたのではないかと考えられる。「道路のそば」という表現は誤りの表現である。

2. 前にゴミ箱にゴミを全部混ぜて捨てた。

「前に」の意味は前方を指示する、対象として前を指し示す際の表現。「前に進め」などのように言う。(日本語表現辞典 Weblio 辞書) NLT 検索結果、「前に敵がいる」「犯人は目の前にいる」「私の前に人はいない」などの用例が出ている。学習者が表現したい意味は不明で不自然な日本語である。

v. NLT ツール使用について

自分が書いた作文を NLT ツール使用による修正を行った。その結果、自分の間違いに気づき、正しい言葉を選択することができた。つまり、学習者は NLT でことばの表現の適切さを検討することができる。辞書で検索する際、例文が少ないまたは、例文がない場合もあり、そこから言葉の適切さが判断できないと考えられる。このことから、NLT ツールの

使用は学習者にとって有意なものであり、学習者の自律性育成を支援するツールであるといえる。しかし、NLT ツール使用により、意外なことが見られた。たとえば「人間が問題を解決できない限り」という文のかわりに人間が問題を克服できない限り」のようなミスが現れた。その原因は、NLT ツールには言葉の意味が挙げられてないためであると考えられる。そして、NLT ツール使用についてはいい点、悪い点の感想を書かせた結果、いい点はツールに挙げられた用例により言葉づかいがより深く理解できる。以前より言葉づかいに自信を持つように感じた。悪い点については、NLT ツールはアプリではないためネットが繋がらないときは不便である。言葉の意味がないため意味を知りたいときは不便である。日本語学習者にとって言葉の意味や説明などがなく、一度に多数の用例が表示されるため、どのコロケーションを選択すればよいかの判断が難しい。その上、表示される用例がコーパスの原文そのままであるため漢字の読み、語彙、文法の難しさなどの点では理解がたい。

7. 結論

本研究では、ミャンマーにおいてヤンゴン外国語大学日本語を専攻している 3 名の中級学習者が作文を書くとき、見られるコロケーション誤用分析を行った。その結果、先行研究の示唆通り、学習者が母語の直訳からの誤用は語彙の習得に影響を与えていることが明らかになった。本研究から、国籍・母語が違ってても日本語のコロケーション習得には母語が若干干渉していることがわかった。次は、寺嶋（2016）が指摘しているように、コロケーション誤用は辞書にも大いに寄与している。辞書において的確な日本語の意味表示不足、複数の訳語表示が意味の違いを理解するための情報不足などが誤用を生み出すことも明らかになった。更に、NLT ツール使用により学習者自身が修正を行った結果、共起表現リストから適切な表見を確認することができた。NLT 検索により学習は自律的学習に支援し、効果が見られたといえる。しかし、本研究では、コロケーションの概念を語と語の組み合わせに限定して考察した。田野村（2010）はコロケーションの概念を語と語の関係に限定すべき理由はなく、句や節、あるいは、構成素を成さない語連続もコロケーションの観点から観察すべき対象の範囲に含めているという示唆している。今後はその点を踏まえ、コロケーション誤用分析を検証していきたい。

参考文献

- 国広哲弥（1985）「慣用句論」『日本語学』4（1）、pp.4-14
- 佐藤修子・Le Feng un（1993）「大連外国語学院日本語学部生の日本語作文に見られる誤用」『北星論集（文）』30 pp.107 - 127
- 金智英（2015）「日本語を母語とする韓国語学習者のコロケーション学習に及ぼす指導の効

果一文脈指導と非文脈指導の比較から」『言語文化と日本語教育』50pp. 71-80

田北光子（1995）「初級後期の日本語学習者の作文の誤用例とその対応—当センターの場合—」『長崎大学外国人留学生指導センター紀要』3pp. 139-150

田野村忠温（2010）「日本語コーパスとコロケーション—辞書記述への応用の可能性—」『言語研究』138 pp. 1-23

寺島弘道（2016）「日本語学習者にコロケーションの選択とその考察—DIC 法と DIC-LP 法の比較から—」『日本語教育』163 pp.79-94

関連 URL

<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/>